

## 「知る」と「分かる」

マックス・ホレリ

飯舘村に到着する前、次のような言葉を耳にしました。

「自身の研究より、飯舘村の状況を見て、聞いて、感じてください。課題や概念を考える前に、是非住民の生の声を耳にして下さい。」

これらのアドバイスを耳にし、私の想いと共鳴するものを感じました。

研究者として物事を深く知るにつれ、とかく先入観が働いてしまうものです。言い換えれば、福島放射能汚染問題に対しても、目の前の知識だけで決め込み過ぎることは良くないことだと思っています。

3日間、飯舘村の日常生活を経験するチャンスをいただきました。たったの3日間ではありましたが、日々の苦難や辛さの中にも、住民の方の笑顔を見ることができ、様々な想いを抱きました。

放射能汚染によって、飯舘村の人々と環境との関係性は大きく変わりました。

特に、これまでのように自然に触れたり食したりする事に対しては、大きな変化があったでしょう。人々の日常が変わり、住む世界が全く変わってしまったと言っても過言ではないように思います。このような環境の変化が、人々の知識を変え、価値観をも変えてしまいました。

私はこの現実を知りとてもショックを受けました。

また、除染を行ったと言っても、放射能汚染のレベルは場所によって大きく異なり、測定には想像以上の労力が必要だという事も大きな衝撃でした。

例えば一歩進めば、放射線のレベルは大きく変わる。このような放射能汚染はまるでローラーコースターのように、レベルの高いところと低いところが隣接している状況です。

このような事実を知り、政府が公表する放射能汚染レベルの平均数値とはどのように定義づけられているのかということにも疑問がわいてきます。

飯舘村住民は避難を余儀なくされたため、これまで大切に築かれてきたコミュニティはバラバラになってしまいました。

しかし、避難所の仮設住宅で生まれた新たな生活、人々の絆やコミュニティにも出逢いました。仮設住宅に住んでいる多くはお年寄りですが、彼らは「もう被災地の故郷へは帰らない」と言います。なぜなら、仮設住宅に5年住んだ彼らにとって、この場所はすでに、大切な友人、人々に囲まれた住み良い場所になっているからです。

政府は、足早に取り組む「被災者帰省」のための被災地除染作業にどのような意味と価値を感じているのでしょうか。

人々にとって住み良い場所の定義とは一体何なのでしょう。

これらは放射能測定器の数値だけで見出せるものではないように私には思えます。

放射能汚染問題とは、人々の心、人間関係や生活環境への被害でもあります。一人一人が異なる環境にいて、異なる問題を抱え、一様には回答が出ない問題を抱えているのです。

日本語には「知る」そして「分かる」というふたつの動詞があります。

「知る」ことは知識を取り入れること。一方「分かる」ことは背景を理解し現状を深く見ることだと思えます。

つまり、放射能汚染問題を解決に導くために必要なことは、「分かる」ことなのだとこの旅で私は考えました。

〈マックスिम・ポレリ Maxime Polleri〉

モントリオール大学で人類学と日本文化を専攻。現在、ヨーク大学文化・社会人類学博士課程。2015-2016 国際交流基金日本研究フェロー。専門は文化摩擦や政権争い、原子力の恐怖や政府の予定など、人の物の見方や社会的関係に基づく福島第一原子力発電所の事故と放射能汚染問題の研究。